Osaka University Knowledge Archive

Title	認識の歴史性
Author(s)	中山, 康雄
Citation	年報人間科学. 1998, 19, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12831
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

認識の歴史性

中山　康雄

〈要旨〉
本稿は、歴史性を考慮した認識論のスケッチである。それは、簡単に言えば、クワインの全体論とクーンの科学哲学とガダマーの解釈学的哲学を統一的に記述する試みである。この記述のために用いられる枠組みは、中山（1995, 1997a）やNakayama（1997b）で提案された信念構造の理論（theory of belief structures, TBS）[1]である。また、それは、動的な全体論的認識論を構築する試みでもある。本稿で扱う信念の担い手としての主体は、歴史的に位置づけられた存在者として解明される。

キーワード
信念構造
信念体系
全体論
パラダイム
解釈学

1. *カントの認識論とその批判

本稿で構築される認識論の立場を鮮明に描くためにある哲学的立場と比較したい。この対比されるべき認識論として、私は、カント（Immanuel Kant）の認識論を利用したい。しかし、本稿のカント解釈は誤りであるかもしれない。そこで、念のため、仮想の哲学者「*カント」に登場してもらうことにする。私の議論は、この仮想の哲学者*カントが実際の高名な哲学者と同じ考えの持ち主だったかどうかに依存しないものである。

*カントの理論哲学には「物自体」（Ding an sich）が登場する。彼によれば、感性とは外界の対象から刺激されることにより表象（Vorstellung）をえる能力である。そして、対象について考えるためには、悟性（Verstand）が必要になる。概念は悟性から生まれるものである。また、*カントは、対象が感性により与えられているため、「物自体」については知ることはできないと考える。

*カントは、このように感性と悟性という認識に関する二つの能力を設定することにより、素朴実在論を避けることができた。我々に与えられているのは、物自体ではなく、感性を通して得られた現象である。そして、認識は、現象を受け取ることのみによって成立するのではなく、現象にカテゴリーという「概念図式」を適用することにより初めて成立する。つまり、認識には、外界からの刺激を受け取る能力としての感性とこの現象にカテゴリーを適用する能力としての悟性の両方が必要となる。

このような*カントの認識論の大枠は現代でも維持できるものと私は考える。それは、感覚器が刺激され、その刺激が脳の内部で処理されることにより外界についての認識が生まれるという構図は、現代科学でも認められているからである。問題は、*カントの認識論が静的なものであることにある。*カントは、悟性の基本構造は先験的に与えられたものであり、文化や歴史に影響されないと考えている。しかし、分析的言明と綜合的言明の間の境界が曖昧であることを指摘したクワインの全体論に従う者は、悟性の基本構造の先験性を受け入れることはできない。そして、ニュートン力学を信奉していた*カントにとり、ある時代に確実と思われていた科学理論がその後疑われて他の理論にとって代わられるという事態を想像することは困難だったろうし、まして、それを説明することはできなかっただろう。

*カントの静的な認識論を批判することにより、歴史的主体を軸に展開する認識論の可能性が開けてくる。そして、そのような認識論の形態をスケッチするのが本稿の課題でもある。それは、第3節に明らかになるようにクワインの全体論を基礎にする認識論である。しかし、クワインの全体論自身にはまだ歴史的要素が欠けている。本稿が試みるのは、クワインの全体論にクーンの科学哲学やガダマーの哲学的解釈学にあった歴史性を加える作業である。このためには、これらの理論が、認識論の言語に翻訳されねばならない。そのための第一歩として、クーンの科学哲学とガダマーの哲学的解

釈学の間に在る共通点を認識論の観点から統一的に表すことから始めよう。

［1］ クーンの科学哲学とガダマーの解釈学的哲学の間の共通点

（a）認識には、その基盤が必要である。この認識の基盤を「認識基盤」と呼ぼう。Kuhn（1962）はこれを「パラダイム」（paradigm）と呼び、Gadamer（1960）はこれを「地平」（Horizont）と呼んだ。[2]

（b）この認識基盤は歴史的に形作られたものである。そして、それは歴史の中で変遷していった。

（c）認識基盤を離れて認識は成立しない。つまり、認識のための中立的言語というものは存在しない。

この認識基盤は、クワインが語る「信念総体」に近いものである。*カントとの違いは、*カントが悟性の認識基盤としての概念図式を固定した先験的なものとして考えたのに対し、この認識基盤を歴史的に規定されたものとして考えるところにある。以下の議論において、ここで述べた歴史的に形成された認識基盤が、クワインの全体論やクーンの科学哲学やガダマーの哲学的解釈学といかに関わるのかを明らかにしていきたい。[3]

2. 信念構造の理論

この節では、以下の議論における記述の枠組みとなる「信念構造の理論」（TBS）を導入する。TBSは、元来、中山（1995）でクーンやラカトシュの科学哲学の立場を厳密に記述するために定義されたものである。そして、中山（1997a）およびNakayama（1997b）は、TBSを言語哲学の問題に適用した。その基本的考えは、次のテーゼ［2］に見られるように、認識状態を信じられている文の集合によってではなく、文集合間の順序構造によって表すことにある。

［2］ 信念構造の理論の背後にある基本的主張

（a）単一の文ではなく、一連のまとまった主張（＝文集合）が信念対象の単位であり、信念の強さには程度がある。この見方に従うなら、認識状態は文集合よりも、文集合の集合と順序関係からなる構造として表わす方が適切なはずである。

（b）ある人が記憶している情報の総体が考慮に入れられるべきである。ある人が固く信じているものの総体は、記憶されている情報の総体の要素のうち、強く信じているものの方から整合性を保ったままできるだけ多くを集めたものと言える。

TBSの中心になる三つの概念に、信念構造、極大部分、信念体

系というものがある。それらは、次のように定義される。

［3］信念構造、極大部分、信念体系の定義

（a）［信念構造］まとまって信じられていることを表わす文集合を信念塊、信念塊の集合を信念領域と呼び、Sで表わす。信念塊の間の順序関係を信念順序と呼び＞で表わす。X＞Yは、XがYより信頼されていることを表している。また、二つの信念塊が同程度に信じられていることを表わす同値関係を～で表わす。[1] さらに、X1とX2、そして、X3とX4が同程度に信じられ、X1がX3よりも強く信じられているなら、X2はX4よりも強く信じられているということが常に成り立つとする。

（∀X1∈S ∀X2∈S ∀X3∈S ∀X4∈S(X1～X2 & X3～X4 & X1 ＞ X3 ⇩ X2 ＞ X4)）。

信念領域と信念順序および信念同値関係からなる構造を「信念構造」と呼びBで表わす。Bは、〈S, ＞, ～〉という構造である。信念構造は、ある人の認識状態を表わすために導入されたものである。

（b）［極大部分］Bの極大部分は、強く信じている信念塊から出発して整合性を保ったままできるだけ多くのものを集めてできたものである。Bの極大部分に含まれている信念塊は、そうかもしれないと思われている信念の集まりである。「Bの極大部分」の正確な定義は次のようになる：

信念構造B＝〈S, ＞, ～〉が与えられている時、次の三条件を満たすSの部分集合Vを「Bの極大部分」と呼ぶ。

（i）［整合性］：∪Vは無矛盾。

（ii）［上からの収集］：XがVに含まれているならば、Xよりも信頼度が高いYはどれもVに含まれている。

（iii）［極大性］：（∪V）∪Xが無矛盾で、Xよりも信頼度が高いYがどれもVに含まれているならば、XもVに含まれている。

（c）［信念体系］Bに対する信念体系K(B)は、Bのどの極大部分にも含まれている信念を集めたものである。だから、それは確信をもって信じられている文の集合と言える。信念体系は、クワインの「信念総体」に相当するものを表現するものである。[3] 正確な定義は次のものである：

∩{∪V|VはBの極大部分}を「Bに対する信念体系」と呼び、K(B)で表わす。

信念構造は、新たな文集合を信念領域Sに付け加えたり、Sからある文集合を削除したりするだけではなく、S中の信念順序を変えただけでも変わってくる。B_1(＝〈S_1, $>_1$, $\sim_1$〉)を変更前の信念構造、B_2(＝〈S_2, $>_2$, $\sim_2$〉)を変更後の信念構造とする時、「信念構造変更の基本操作」は次のように規定できる：

［4］信念構造変更の基本操作

（a）［順序変更］：順序を変える。例えば、…X$>_1$Y…を

…Y>$_2$X…に変える。

(b)［付加］：ある文集合を新しくS_1に付け加え、順序を与える。

(c)［削除］：あるS$_1$の要素を取り除き、この要素に関する順序付けを取り除く。

TBSにおける消去の操作は、人間の認識活動に対応させると完全な忘却にあたる。これに対し、あることが信じられなくなることは、それを表す文が信念体系に含まれないことで表現される。忘却される信念は必要とされることが少なかったものが多いだろうから、重要な認識状態の変化は、新しい信念の付加や信念順序の変更により起こると考えられる。知覚や他者から情報を得ることによる認識状態の変化は、信念の付加により説明できる。これに対し、見方の変更は、信念順序の変更により説明できる。複雑な信念構造の変更は、この三つの基本操作を組み合わせることにより実行できる。このように定義された信念構造を用いると幾つかの日常的表現を厳密に規定できる。

［5］認識状態の表現のTBSを用いた規定

(a)「ある言明Xに疑いの目を向ける」：Xに関する信頼度を下げる。

(b)「ある言明Xを絶対に正しいと思う」：Xに関する信頼度が非常に高い。

(c)「ある言明Xが正しいと信じている」：Xは信念体系に含まれている。

(d)「ある言明Xが誤りだと思っている」：Xを否定する言明が信念体系に含まれている。

(e)「ある言明Xが正しいかもしれないと思っている」：Xは極大部分の一つに含まれている。

(f)「言明Xを認めるべきか、Yを認めるべきかのディレンマに陥っている」：Xを含む極大部分も、Yを含む極大部分も存在するが、XもYも信念体系には含まれていない。

$(\exists V(X \subseteq V \,\&\, [V$はBの極大部分$]) \,\&\, \exists V(Y \subseteq V \,\&\, [V$はBの極大部分$]) \,\&\, \mathrm{not}(X \subseteq K(B)) \,\&\, \mathrm{not}(Y \subseteq K(B)))$。また、XとYは、認められている信念体系を前提にすると矛盾する$(K(B) \cup X \cup Y \vdash \bot)$。

(g)「Xを根拠にYを信じる」⇩ X>Y（XはYより信頼されている）

(h)「Xを前提にYを信じる」⇩ X>Y（XはYより信頼されている）

新しい信念塊の付加の基本形には、次の三つのものが考えられる。

［6］新しい信念塊の付加の基本形

(a) 認識主体が、知覚により新しい信念塊を形成する。

(b) 認識主体が、自らの考察により新しい信念塊を形成する。

(c) 認識主体が、他の認識主体が発した言明を情報として受け入

れる。aが信念塊Xをbに伝達した時、これを$a—(X)\rightarrow b$で表そう。

新しい信念塊の付加一般は、この三種あるいはそれらを組み合わせたものとして考えられよう。[6 c]を用いて「信念塊の伝承」を定義できる。

[7]「信念塊の伝承」の定義

$a_1, \ldots, a_n$を認識主体としXをある文集合とする。この時、

$a_1—(X)\rightarrow a_2—(X)\rightarrow a_3—(X)\rightarrow \ldots —(X)\rightarrow a_{n-1}—(X)\rightarrow a_n$

が成り立つならば、「信念塊Xは、a_1からa_nに伝承された」と言うことにする。ただし、ここで$a—(X)\rightarrow b—(X)\rightarrow c$は、

$[(a—(X)\rightarrow b)\ \&\ (b—(X)\rightarrow c)]$の略である。

[7]によれば、a_1からa_nへの信念塊Xに関する伝達の鎖が存在することは、「信念塊Xは、a_1からa_nに伝承された」と表される。TBSの枠組みでは、aからbへの信念塊Xの伝達は、両者の信念構造の中にXが取り入れられたことを意味しているにすぎない。aがXを信じているとしても（$X\subseteq K(B_a)$）、それは、bもXを信じるようになることを保証しない（即ち、$[X\subseteq K(B_a)\ \&\ (a—(X)\rightarrow b)]$は、$X\subseteq[B_b$の信念領域$]$は含意するが$X\subseteq K(B_b)$は含意しない）。それでは、このTBSを用いて歴史的視点を取り入れた認識論を展開していこう。

3. クワインの全体論

クワインの全体論の簡潔な描写は、「経験主義の二つのドグマ」に与えられている。

「地理や歴史のごくありふれた事柄から、原子物理学、さらには純粋数学や論理に属するきわめて深遠な法則に至るまで、われわれのいわゆる知識や信念の総体は、周縁に沿ってのみ経験と接する人工の構築物である。あるいは、別の比喩を用いれば、科学全体は、その境界条件が経験であるような力の場のようなものである。周縁部での経験との衝突は、場の内部での再調整を引き起こす。いくつかの言明に対して、真理値が再配分されなければならない。」（Quine(1961)p.42, 邦訳 p.63）

このように信念総体は、「二つのドグマ」においては、「周縁に沿ってのみ経験と接する人工の構築物」と捉えられていた。この信念総体と経験の接点とは何なのか？この問いに対するある解答が、『言葉と対象』の中で試みられる。

「二つのドグマ」のメタファーで言う構造物の周縁に近い文は、『言葉と対象』では観察文と呼ばれることになります。観察文と経験との結合は、知覚的に類似した神経入力の諸範囲との結びつ

きとして説明されました。その結びつきは、原初的には、条件づけによるものでした。そして、時至れば、各人がもつ世界に関する発展しつつある理論からの反作用によって、さらに別の結びつきが作り出されるのです。」(Quine (1991) 邦訳 p.136)

これらの引用の考えを総合すると、次のようなクワインの全体論の像ができあがる。

[8] クワインの全体論

(a) [信念総体] 信念総体は、整合的な文集合により表すことができる。

(b) [整合性] 信念総体は、整合性を保ったまま変化する。

(c) [保守主義] 信念体系の変化は徐々に起こる。信念総体が一挙に入れ換えられるようなことはない。[6]

(d) [経験の重視] 経験に近い文とそうでない文が存在する。

(e) [観察文の特別な位置づけ] 観察文[7]、即ち、経験に極めて近い文、は強く信じられ、改訂されるのはごくまれである。

このクワインの全体論に含まれる諸テーゼをTBSの表現に翻訳することができる。

[9] TBSを用いたクワインの全体論 [8] の表現

(a) 信念総体は、TBSで定義された信念体系として表現できる。

(b) 信念体系は整合的なので [8b] は満たされている。

(c) [8c] はBからB*への信念構造の変化において、信念体系K(B)とK(B*)との間の変化が小さいことを要求している。

(d) 信念構造に含まれる文には、経験の証拠により、ほぼ直接的に支持されるものと間接的にのみ支持されるものとがある。

(e) Xが経験の証拠によりほぼ直接的に支持される文集合であるなら、Xは信念構造Bにおいて強く信頼されるよう位置づけられる。知覚から直接的に得られた情報は、普通、ほとんどそのまま信じられる。

[9b] は、信念総体を信念体系として捉える解釈 [9a] を支持している。[9d] は、事実に基づいて受け入れることができるテーゼである。[9c] と [9e] は、人間の認識状態を適切に表現するためには、信念構造にどのような制約を与えねばならないかを示している。

「理論の決定不全性」は、経験が最も重視される信念総体のテストになることから出てくる帰結である。そして、「観察の理論負荷性」は観察と理論の間に語彙の共有を通した論理的関係が成立するために出てくるテーゼである。[9c] や [9e] に表された経験主義的テーゼを制約としてTBSに加えることにより、我々は、これらのクワインの考えを表すことができる。[9e] はクワインの言う「観察文」が、何故信念総体のテストとしての位置を持ちうるのかを説明する。[9e] によれば、Xが経験により裏付けられたある

観察文の集合であるならXは強く信じられる。従って、そのような観察文集合Xはほとんどいつも信念体系の中に取り入れられることになり、このXの受け入れにより矛盾がおきた時には、Xを新しい信念体系の中に保持したままの信念構造の変更が迫られることになる。[8]

TBSの理論とクワインの全体論の大きな相違は、クワインが信念総体の再調整を「真理値の再配分」により説明しようとしているのに対し、TBSでは信念体系の変化が信念構造内での信念順序の変化や新しい信念塊の付加などに伴って起こる現象として説明されることにある。また、クワインの方法では、「ある言明Xを信じている」、「Xを信じていない」ということしか表現できない。これでは、信念状態の表現として不十分である。[5]で指摘したように、TBSでは、この二つの表現の他に、「Xに疑いの目を向ける」、「Xを絶対に正しいと思う」、「Xが正しいかもしれないと思っている」、「Xを認めるべきか、Yを認めるべきかのディレンマに陥っている」等のことを表現できるのである。そして、中山（1997a）やNakayama（1997b）で示したように、「前提」という概念の分析もTBSの枠組みを用いて可能になる。さらに、信念順序のちょっとした変更が、時には信念体系の大幅な変更をもたらすことがTBSの枠組みから帰結する。このことを用いて、それまでの信念総体に様々な変更をつきつける大発見というものが何故一瞬の内に起こりうるかを説明することができる。

4. クーンの科学哲学

クーンの科学哲学における主要なテーゼは、科学は通常科学と科学革命という二つの異なるタイプの研究活動を通して発展していくというものである。そして、通常科学から科学革命の移行期に危機の時代が位置するとクーンは考える。これら三つの科学の発展状態は科学者集団の構成員の認識状態を用いて表現できる。クーンが「補章―1969年」でしたように、科学者集団の存在を最初に仮定することにする（Kuhn(1962)2nd edn. 参照）。

[10] クーンの科学哲学の基本的用語

（a）［通常科学］通常科学の時代には、ある分野の科学者集団のほとんどの構成員により、その分野の他の理論よりも強く信じられている基礎理論が存在する。当然、この基礎理論は、その補助仮説よりも強く信じられている。この状態では、この基礎理論を基礎にして専門分野に細分化された研究がなされる。

（b）［危機］危機の時代では、ある分野の科学者集団のほとんどの構成員により強く信じられているような共通の基礎理論が存在しない。ここでは、競合する基礎理論 $T_1, \ldots, T_n$ が存在し、その基礎理論のいずれかを他のものよりも強く信じている科学者と、どの理論を優先すべきかディレンマに陥っている科

学者とがいる。このような時代には、その分野の基礎的問題に対する議論が活発となる。

（c）［科学革命］それまでにはなかった新しい基礎理論が、ある分野の科学者集団のほとんどの構成員に受け入れられるようになる。これを出発点に、この基礎理論を基にして通常科学の研究が再度始まる。

中山（1995）は、補助仮説が基礎理論Tの防御帯となるというLakatos（1978）の考察をTBSを用いて説明している。Tが基礎理論として受け入れられている状態では、Tのすべての補助仮説AにおいてTはAの前提にされており（従って、［5h］よりT⊃Aが成り立つ）、観察に基づく信念を表す文Oとの矛盾をTとその補助仮説が引き起こした時には、常に補助仮説の方が捨てられるという結論が得られる。これが、自然がつきつける問題に対して、通常科学を実践する研究者のとる態度なのである。Putnam（1974）が論じたように、このような状態において、観察Oを基礎理論Tを用いて説明することを可能にする補助仮説Aを見つけだすこと（T∪A⊢O）がクーンの言う「パズル解き」に相当する。そして、クーンが観察したように、この通常科学における研究活動は、何度か壁に突き当たり、その都度古い基礎理論を新しい基礎理論で置き換えることが必要になったのである。

Kuhn（1962）は、科学革命の後では世界は異なって見えると主張する。ある科学者がそれまで彼が受け入れていた基礎理論T_1の代わりに新しい基礎理論T_2を受け入れるようになったなら、彼は、T_1の補助仮説の多くを捨て去ってしまうだろう。T_2を受け入れ、それを強く信頼し、それを軸にT_2の補助仮説を考え出すことにより「パズル」を解こうとする作業はそれまでの作業とは大きく異なったものとなる。それは、T_1を用いて仕事をしていた時の解法の見本例が使えなくなったことを意味し、それまで身につけてきた問題解法のスキルが発揮できなくなったことを意味するのである。

Kuhn（1962）によれば、通常科学期における基礎理論の共有は、教科書や教育を通して可能となる。つまり、ここでは、著者や教師を媒介にした信念塊の伝承が起きているのである。また、見本例に基づいて与えられた問題を解くことにより、学ばれた理論のうちどの部分が固定された基本的なものであり、どの部分が個々の問題に即して修正されるべき補助的なものであるかが学習される。このようにして、実習を通して、信念塊のみでなく、信念構造もほとんど変形を受けることなく伝承されうる。このような信念構造の部分的伝承が、通常科学における研究活動を支えているものなのである。これに対し、危機の時代では、信念塊の伝承は起こっても、信念構造の伝承は保証されない。このような時代では、どの理論が重要なのかということに関して科学者たちの判断がまちまちになっているのである（中山（1995）参照）。

経験科学における経験の持つ意味は、第3節で論じたクワインの経験主義から明らかだろう。経験は信念総体のテストの役割を果たすのである。クワインの保守主義（［8c］，［9c］参照）は、通常

科学の場面で最も忠実に守られている。「パラダイム変換」に対する科学者たちの示す抵抗は、クワインの保守主義から適切に説明できる。しかし、科学革命の場面でさえも、ある程度の保守主義は守られねばならない。そして、Kuhn（1962）もこのことを観察している。

「さらにそのようなことが起こり、新しいパラダイム候補が引き出されても、科学者は二つのきわめて重要な条件が満たされない限り、新しいパラダイムを持ちたがらない。その二つの条件の第一は、新しい候補が、他の方法ではうまくゆかないある著しい、よく知られた問題を解決できるように見えることである。二番目に、新しいパラダイムは、その前任者によってかち得られた具体的な問題解決能力の大部分を、保持することを約束せねばならない。」（Kuhn(1962)p.169, 邦訳 p.191）

このように、クーンの科学哲学は、第3節で展開した全体論の科学哲学への適用により得ることができる立場なのである。

5. 信念構造の歴史性とガダマーの「地平」

Gadamer（1960）が用いる「地平」という語は、歴史的に規定された有限な理解の足場として解釈することが多くの文脈で可能である。[9] そうであるなら、「地平」は、信念塊の継承を通して歴史的に形成された信念構造と解釈できるだろう。

［11］「地平」は、信念塊の継承を通して歴史的に形成されたある人の信念構造である。

この立場を取るなら、「地平」という語は、ある行為主体の認識状態を記述するために使われていることになる。しかし、Gadamer（1960）において、この語は、しばしば、行為主体とは独立のある実体を指示しているかのように用いられている。そこで、この節では、ガダマーの考察をそのまま受け入れ解明するのではなく、［11］のテーゼを基礎にして、それを批判的に継承する道をとることにしたい。

Gadamer（1960）が明らかにしたのは、人間存在の歴史性である。この人間の根本的歴史性を本稿での今までの議論から導き出すために、次のテーゼを認めることにする。

［12］信念構造と信念体系に関するテーゼ

（a）人は、生まれた時、何も信じていない。即ち、生まれたばかりの人の信念構造は空の信念構造〈ϕ, ϕ, ϕ〉により表すことができる。

（b）新しい信念の付加は、［6］の操作により起こる。そして、［6c］の操作により他者から獲得された信念は、信念体系のかなりの部分を占めている。

（c）合理的行為者の行為選択は、彼が現時点で所有する信念体系に依存する。

［12 a］のテーゼは、事実とも言える明白なものである。［12 b］も、多くの信念の形成には、言語の習得が不可欠であることを考えると、当然認めるべきテーゼである。「魚」という語を理解するには、「普通、魚は水中に住む」、「普通、魚はひれを持つ」等の文を信じることが必要になる。これらは、ある言語集団の中で共有されている基礎的信念である。そして、自ら体験していない個別事象についての信念は、当然、何らかの形で他者を経由して得られるものである。また、［12 c］は、合理的行為者の必要条件ともとれる自明の文である。つまり、合理的行為者においては、その行為の選択が信念体系に依存すると考えることができる。この［12］のテーゼから、人間存在の歴史性に関する次のテーゼが導出される。

［13］人間の歴史への依存性に関するテーゼ

（a）個々の人間の認識基盤としての信念構造が彼の個人史に依存するという意味で、人間は歴史的存在者である。

（b）個々の人間の認識基盤としての信念構造がそれまでの「知の歴史」に依存するという意味で、人間は歴史的存在者である。

（c）個々の人間の行為が歴史的に形成された認識基盤としての信念構造に依存するという意味で、人間は歴史的存在者である。

［13 a］は、［12 a］と［6］から導き出されるテーゼである。［13 b］は、［12 b］からの帰結である。そして、［13 c］は、人間を合理的行為者として認めた時、［13 b］と［12 c］から帰結する。ただし、合理的行為者でない者も、彼の行為がその時点での彼の信念構造に何らかの形で依存すると考えることは自然である。

人間は、歴史に規定される存在者であるとともに歴史を制作する存在者でもある。次のテーゼは、歴史に参与するものとしての人間についてのものである。

［14］人間による歴史の生成に関するテーゼ

（a）行為は、自然と社会に因果的影響を与える。その意味で、行為者は、行為することにより歴史的未来を規定することに参与する。

（b）Searle（1995）が論じたように、集団的共有信念が「生まの事実」（brute facts）だけでは説明できない「社会的事実」（social facts）の存在を可能にする。社会は、他の人々が受け入れている信念を同様に受け入れることにより成立する。そして、この集団的共有信念が大きく崩れる時、社会も崩壊する。その意味で、人間は、彼が集団的信念（collective belief）を持ち、その信念に従い行為することにより、歴史における社会的現実（social reality）を維持することに寄与している。

［14 a］と［14 b］は、自らの信念に基づいて行為することにより、

行為者がこの歴史的現在の維持や歴史的未来の規定に貢献していることを表している。

共有信念の変遷を考える時、保持、拡張、変転という少なくとも三つの変遷形態を考えることができる。[10] 先史時代においては、共有される基礎的信念の変遷はわずかだっただろう。ある共同体におけるこのような共有信念の伝承を「保持」と呼ぶことにする。そこでは、同様の社会形態が何百年何千年と継続していた。ある共同体における共有信念の拡張や変転は、歴史上様々な形で起こってきた。共有信念の変化は、行為の変化をもたらし、それが社会形態の変化や環境の変化をもたらした。先史時代に保たれていた共同体の生活形態は、自然環境の平衡状態の維持を可能にしていた。しかし、歴史時代に入ってからこの平衡状態は崩れ、人間と自然の均衡が常に新しく規定されるようになった。このような変転の中では、新しい共有信念が生まれ伝承されるとともに、幾つかの共有信念は魅力のないものになり忘れ去られていく。そして、この忘却により歴史的距離が生まれる。歴史的に隔てられた二人の人間にとり、同じように考えること、つまり、同じ観察から同じ結論にいたることが困難になる。忘却されたものは、発掘の可能性を持つ。ここに、過去に関わることによって得られる新しい発見の可能性が現れる。

人文科学における業績は、自然科学の業績よりもはるかに強い個人の刻印を受けている。ある意味で、そのような業績は、まさにその人にしか可能でなかったものである。つまり、その人の信念構造の形成には、個人的な経験が至るところで関係しており、人文科学の彼の業績に現れる信念の表明は、しばしば、このような個人的な刻印に影響されて形成された信念構造の一部から切り取られたものである。そこで、その業績を理解するためには、その業績だけの評価を越えてその著者の信念構造全体との対話が迫られることになる。そして、その著者の持つ信念構造の要素の多くのものが伝承という手段により取り入れられたものなら、我々は、その著者が何故そのように考えるようになったかを説明するために、しばしば、その著者への「信念の影響史」をたどることを強いられる。このような信念の影響史は実に錯綜している。そして、[12 b] や [13 b] で述べたように過去の著作を理解しようとする我々の信念構造を形作る要素の多くが、また、歴史的に伝承されたものである。ガダマーの哲学的解釈学の一つの意義は、信念の影響史という認識活動の歴史的背景—ガダマーはこれを「影響作用史」(Wirkungsgeschichte) と呼ぶ—を明らかにすることによって「解釈」という作業を正しく位置づけたことにある。

6. 学問における信念の伝承と改変

自然科学においても人文科学においても、信念の伝承と改変の問題が存在する。Kuhn (1962) の議論は、自然科学における信念構造の問題に対応し、Gadamer (1960) の議論は、人文科学における信念構造の問題に対応する。両者に共通する認識論的テーゼは、[1] で述べたように、認識は「パラダイム」や「地平」と呼ばれる認識

基盤を背景にはじめて可能になるというテーゼである。両者を隔てているのは、第一に、自然科学においては、通常科学を支えるパラダイムの共有というある専門領域に関する信念構造の共有が集団の構成員の間に可能になるという事態である。このことは、自然科学における信念構造の部分的伝承が人文科学よりもはるかに容易に起こりうることを意味している。

自然科学の学問領域では、何が基礎的理論であり、何が観察言明であり、何が補助仮説であるかは、比較的はっきりしている。クーンの言う通常科学の段階では、科学者aからbへのある専門領域での信念塊Xの伝達により、信念構造へのXの位置づけがbにおいてもaのものと類似して形成されることが期待できる。しかし、クーンの言う危機の時代では、もはやこのことは一般的には成り立たない。それは、競合する基礎理論間の位置づけが科学者たちの間で一致していないからである。

いわゆる人文科学においては、信念塊の順序の伝承は、さらに困難になる。ある本の中で語られることは明確に表現されていても、語られている信念塊の間の順序は、語られていない場合が多く、推測するしかない。だから、人文科学においては、著者の信念構造を再構築することは容易なことではない。

また、信念構造の大規模な改変も自然科学と人文科学では異なる。人文科学の領域では、たいてい、信念構造の大規模な改変は、個人レベルや小集団レベルに限られている。

そして、自然科学の信念は、多く、新しく学習されて得られるものである。学習者は、新しい世界の記述法を学ぶのである。これに対し、過去に書かれたテキストを読む者は、多くの場合、そのテキストと批判的に対峙しなければならない。テキストが提示する主張は、しばしば、読者がそれまで持っていた主張と幾つかの点であいいれない。そこで、テキストを読むことによる信念塊の伝承は、ときおり、読者に信念構造の部分的改訂を迫ることになる。テキストに著された著者の信念体系の一部に触れることにより、読者の信念構造が改変していく過程は、ガダマーが「地平の融合」という語により表現しようとしたことに深く関係する。[11] 現在なお読まれている著作は、歴史の中に過ぎ去ったものではなく、読者に読まれることにより、読者の信念構造や価値体系の変更を迫ったり、読者が持つのとは別様の考察があることを現時点において教えるものである。

7. 言語と共有信念の問題

Kuhn（1962）は、危機の時代に別のパラダイムに従って研究する者同志の間での通約不可能性（incommensurability）の問題、つまり互いの議論がかみあわないという問題が存在することを指摘した。丹治（1996）は、この理解可能性に関する問題を、科学の場面だけでなく一般の言語共同体における問題として考察する。[12] 丹治が指摘するように、「言語の理解は、その言語共同体のメンバーに共有されている「信念」を受け入れている、ということから分離できない」（p.171）。この節では、丹治（1996）の提起した問題を本

稿の立場から考察してみよう。

ある言語社会の中に育ち、その言語を学ぶということは、その社会で受け入れられている多くの考えを引き受けることを意味している。[13] しかし、一般にどんな人間も全く同じことを信じているわけではない。もし、信念の共有が言語の共有と同一視されるなら、どんな人々も言語を共有できなくなってしまう。だから、同一言語を共有するための信念の共有とは、程度の問題だと考えなくてはならない。同じ言語を語るためには、同じ語彙や同じ構文論に従わなければならない。しかし、それだけでは、同じ言語を話していると言うためには不十分である。文を交換することにより理解しあえるためには、いわゆる「判断の一致」が必要となる。「判断の一致」は、本稿の立場では、「ある信念の付加から同じ結論を導き出す」ことに相当する。そして、このような判断の一致には、問題となっている領域に関する信念構造が大幅に共有されていることが必要とされる。[14]

［7］で定義された信念塊の伝承は、歴史的伝承だけにあてはまるわけではない。それは、専門家から素人への信念塊の伝承にもあてはまる。ある物質が金（gold）であることを主張する素人の言明の正しさは、専門家の信念を基に確かめることができる。この素人が何を信じているかは、あくまで、その人の信念体系に依存して決められるべきだろう。その人が答えられないことを、その人は信じているわけではないからである。しかし、その人の主張の正しさは、公の基準により判定される。それは、素人の金についての信念は、専門家の知識のごく一部しか含んでいないため、ある金属が金であるかどうかの判定には不十分だからである。その人が、「これは金だ」と主張すれば、この主張の正当性は、化学の専門家の判断にゆだねられるべきである。[15] このように、ある主張の真偽に関する判定については、パトナムの言う「言語の社会的分業」が成立している（Putnam（1975）参照）。このことからわかるように、クワインの考えていた信念総体の経験によるテストは、社会的次元にまで拡張されねばならない。ある理論T_1を支持し、それと競合する理論T_2に反論を加えるための実験は、その理論家自身ではなく、理論T_1を完全には理解していない実験家によっても遂行することができる。また、ある分野での新しい理論の登場が別の近接する分野で受け入れられていた理論を揺るがすということが考えられる。例えば、19世紀後半におけるマックスウェルの電磁気学の確立がニュートン力学を揺るがすことになり、20世紀初期に提案される相対性理論を準備したと考えることができる。このように、「言語の社会的分業」という事実は、学問における権威の確立と権威間の基本的信念体系の整合性を要請する。この要請は、科学を統一的方向へと導くことになる。[16]

まとめ

本稿では、中山（1995）で定義された信念構造の理論ＴＢＳを用いて歴史的次元を考慮した動的全体論（dynamic holism）の構想

を述べた。これは、クワインの全体論を厳密にするとともに、信念間の順序を考えることにより拡張したものである。さらに、これらの信念の起源を問うことにより、信念構造の歴史性と社会性を明らかにした。これらの拡張により、クーンの科学哲学やガダマーの哲学的解釈学の基本的考えを明確に表現することが可能となった。

注

(1) 解釈学的哲学と分析哲学を結びつけようとする点で、本稿の試みはRorty（1979）の試みに通ずるところがあると考えられるかもしれない。しかし、本稿の立場は、新しい認識論を構築する試みであるという点で、Rorty（1979）の立場と対立する。ローティによれば、「解釈学とは、認識論の終焉によって空けられた文化的空間はこれからも満たされないであろうという希望 … を表明するもの」（邦訳 p.368）である。これに対し、本稿の試みは、解釈学を新しい認識論の中に位置づけ説明しようとするものである。つまり、本稿の試み自体は、ローティが批判する伝統的認識論の流れの中にあるものとして考えられるべきである。

(2) 1990年代のクーンは、ガダマーにかなり近い立場を表明している。例えば、Kuhn（1991）では、「私のこれまでの論点は、どんな時代の自然諸科学も、現行世代の従事者がすぐ前の世代から継承する一群の概念に基づいているということである。そういった一群の概念は歴史的所産なのであり、現行の従事者が訓練によって手ほどきを受ける文化に埋め込まれているのであり、部外者にとっては、歴史家や人類学者がほかの思考形式を理解するようになるような解釈学的技法を通してでなくては手に入れにくいものなのである。私はときどきそれを特定時期の科学の解釈学的規定（hermeneutic basis）として語ってきたし、あなたがたもそれが私がかつてパラダイムと呼んだことがらの意味の一つとかなり似ていることに気づかれたかもしれない。」（邦訳 p.105）と語られる。ここで、クーンが言う「一群の概念」は、第2節で導入される文集合としての「信念塊」に対応する。そして、「信念塊の伝承」は、本稿の［7］において定義されている。

(3) 野家（1993）においても、クーンの科学哲学を解釈学と合体させる試みが見られる。しかし、「「科学の解釈学」の目指すもの」（1982）に表れているように、野家の意図は、クーンの科学哲学の考察を解釈学の言語に翻訳することにある。これに対し、本稿の試みは、歴史的次元を包括する全体論的認識論構築の試みであり、クーンの科学哲学もガダマーの解釈学もこの認識論を用いて分析・記述される対象となっている。

(4) ＞は反反射律と推移律を満たす関係であり、～は反射律と対称律と推移律を満たす関係である。

(5) これに対し、Gädenfors（1988）の「信念集合」（belief set）は、ある信念体系から帰結する文をすべて集めたものと規定できる。それは、推論万能者の認識状態を表わしていると考えることができる。

(6) 保守主義は「ノイラートの船の原則」に通ずるものである。また、ゲルデンフォースらのＡＧＭモデルにおける「最小変更の原則」は、このクワインの保守主義を究極まで押し進めたものと言える（Gädenfors（1988）参照）。ＡＭＧモデルにおける信念改訂が、小規模な信念改訂だけを視野に入れていることは、Gädenfors & Rott（1995）においても指摘されている（pp.38-40 参照）。中山（1997a）が指摘しているように、ＡＧＭモデルは、人間の認識の記述と見るならば、あまりに強く理想化されている（p.72 参

照)。クワインの保守主義には弱い保守主義も含まれるだろうが、AGMモデルは最強の保守主義しか表現できない。TBSの枠組みの利点は、AGMモデルのような強い理想化を持ち込まないため、広い範囲の問題に適用可能なところにある。

(7) Quine (1993) では、「観察文」は次のように規定されている。「それらは「寒い」、「雨が降っている」、「それはミルクである」、「それは犬である」といった類いの文、つまり、関係する感覚受容器が触発されているときに問われたなら、それに対して反省をまじえることなく即座に同意することをわれわれが学んでしまっているような、そういった類いの文でなければならない。」(邦訳 p.138)

(8) ここで、[9c] と [9e] の適用が両立しない場合がありうることに注意したい。今まで信じられていた事柄と明らかに矛盾する観察は、錯覚ではないのかと疑われたりする。つまり、[9c] と [9e] の原則は絶対的なものではなく、両原則の適用に関し微妙な調整が必要になる時もあるのである。

(9) Gadamer (1960) における「地平」という語の規定は明確なものではない。「地平とは、一点から見えるものすべてを包括し、包囲するような視圏のことである。これを思惟的な意識に適用して、地平の狭さとか、地平を拡大しうること、新たな地平を開くこと、等々の言い回しをする。とくにニーチェとフッサール以来の哲学の用語法では、思惟が自己の有限的な規定性に拘束されていることとか、視圏が一定の規則をもって拡がっていることとかを特徴づけるために、この地平という言葉が使われた。」(p.286, 邦訳 p.209)

(10) 拡張は、共有信念の累積に相当し、Kuhn (1962) では「通常科学」の時代に起こるとされている。また、累積的でない変化としての変転は、「科学革命」に相当している。

(11) 古典的著作を読むことは自らの信念体系の正当性を吟味する作業と平行して進みうる。このような自らの「先入見」の変更をうながすような理解はGadamer (1960) の「地平の融合」の一側面を表している:「実際、われわれが自分のあらゆる先入見を不断に吟味せねばならないことを考えれば、現代の地平は、不断の形成活動のなかで把握されていると言わねばならぬ。したがって、現代の地平は過去なしに決して形成されないのである。現代の地平がそれだけで存在するわけでもないし、われわれが獲得せねばならない歴史学的な地平がそれとして存在するわけでもない。むしろ理解とは、つねに、それだけで存在しているかのごとく思われているもろもろの地平が融合してくる過程なのである。」(p.289, 邦訳 p.215)

(12) 丹治 (1996) は、「準−同一」な言語を可能にするために、「補償の原理」というものを導入する。しかし、同一の言語を話しながら我々は常に他者を理解できているわけではない。また、理解には様々なレベルのものがある。つまり、同一な言語を話すということとその言語で話された発話を理解するとは別の事柄である。同一な言語を話すということは、話されたことが理解されることを確実にするわけではない。本稿では、中山 (1997a) と同様、「ある発話を理解するとは、自らの信念構造の中にその発話された主張を適切に位置づける作業」(p.67) であると考える。

(13) 逆に、その社会の中に意識的に分離した小集団を作り出す一つの道は、他の人々が用いない言語使用を部分的に導入することによりしばしば達成される。そして、哲学者達の造語もこのような現象の一つであったと見ることもできよう。

(14) 理解や不一致の確認が可能となるためには信念総体の大幅な一致

を前提にすることが必要になるという考えは、Davidson (1984) の「寛大の原理」(principle of charity) に通ずるものである。しかし、ディヴィドソンの全体論は、真理の概念を中心にすえたものであり、全体としては矛盾しうる信念領域を視野に入れた信念構造の理論とは異なるものである。

(15) 私は、信念内容が言語の社会的分業に依存するとは考えない。依存するのは、主張された文の真理値である。こう主張することにより、私は、真理値の担い手は思想であり、信念内容は思想と同一であるとするフレーゲのテーゼを否定している。そして、全体論の立場を取るかぎりフレーゲの思想についての考えを否定するのは当然でもある。また、信念体系が著しく異なる者同志の間の信念帰属の実践は困難になることがわかる。なぜなら、同一の文を両者は異なって理解しているからである。両者がpという文により表現されることを異なって理解しているなら、「彼はpということを信じている」とそのうちの一人が他の一人をさして言うことの意味が不明瞭になってしまう。同様の問題は、Nakayama (1998) でも議論されている。

(16) 田中 (1995) が論じている「自然の階層構造」の問題も、「言語の社会的分業」から説明できるかもしれない。つまり、それぞれの「自然の階層」には、その研究に専門的に従事し、その領域の言語使用や事実判断について責任を持つような「権威者たち」が対応すると考えるのである。

参考文献

Davidson,D. (1984) *Inquiries into Truth and Interpretation*, Clarendon Press. (邦訳: 野本和幸他訳『真理と解釈』勁草書房1991)

Gadamer,H.G. (1960) *Wahrheit und Methode*, 4. Auflage J.C.B. MOHR 1975. (『真理と方法』部分訳: O・ペゲラー編『解釈学の根本問題』晃洋書房1977, pp.171-227)

Gädenfors,P. (1988) *Knowledge in Flux - Modeling the Dynamics of Epistemic States*, The MIT Press.

Gädenfors,P. and Rott,H. (1995) "Belief Revision," in: *Handbook of Logic in Artificial Intelligence and Logic Programming*, Vol.4, Clarendon Press, pp.35-132.

Kuhn,T.S. (1962) *The Structure of Scientific Revolutions*, Chicago UP, 2nd edn. 1970. (邦訳: 中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房1971)

Kuhn,T.S. (1991) "The Natural and Human Sciences," in: D.R.Hiley, J.F.Bohmen, and R.Shusterman(eds.), *The Interpretative Turn: Philosophy, Science, Culture*, Ithaca-London: Cornell UP, pp.17-24. (邦訳: 佐々木力訳「解釈学的転回-自然科学と人間科学」岩波講座『現代思想10 科学論』1994, pp.97-108)

Lakatos,I., (J,Worrall and G.Currie eds.)(1978) *The Methodology of Scientific Research Programs*, Cambridge UP. (村上陽一郎他訳『方法の擁護』新曜社, 1986)

中山康雄 (1995)「科学活動と信念構造」『科学基礎論研究』Vol.23 No.1: 37-43.

中山康雄 (1997a)「コミュニケーションと背景知識」『科学基礎論研究』vol.24. No.2, pp.67-73.

Nakayama,Y. (1997b) "A Holistic Theory for Communication and its Application to Pragmatics," in: P.Weingartner, G.Schurz, and G.Dorn(eds.), *The Role of Pragmatics in Contemporary Philosophy - Papers of the 20th International Wittgenstein Symposium*, pp.683-687, The Austrian Ludwig Wittgenstein Society.

Nakayama,Y. (1998) "Attitudes and Classification of Utterances," in: *Annals of the Japan Association for Philosophy of Science*, Vol.9 No.3. pp.33–52.

野家啓一 (1993)『科学の解釈学』新曜社。

Putnam,H. (1974) "The 'Corroboration of Theories'," reprinted in: I.Hacking(ed.), *Scientific Revolutions*, Oxford UP, 1981, pp.60–79.

Putnam,H. (1975) "The Meaning of Meaning," in: his *Mind, Language and Reality: Philosophical Papers*, vol.2. Cambridge UP.

Quine,W.V. (1961) *From a Logical Point of View*, Harvard UP, 2nd. edn. (邦訳: 飯田隆訳『論理的観点から』勁草書房1992)

Quine,W.V. (1991) "Two Dogmas in Retrospect," in: *Canadian Journal of Philosophy*, Vol.XXI, No.3, pp.265–274. (邦訳: 富田恭彦訳「二つのドグマ」を回顧して」『思想』No.861, 1996年3月号所収 pp.124–136)

Quine,W.V. (1993) "In Praise of Observation Sentences," in: *Journal of Philosophy*, Vol. XC, No.3, pp.107–116. (邦訳: 富田恭彦訳「観察文をたたえて」『思想』No.861, 1996年3月号所収 pp.137–147)

Rorty,R. (1979) *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton UP. (邦訳: 野家啓一他訳『哲学と自然の鏡』産業図書1993)

Searle,J.R. (1995) *The Construction of Social Reality*, Free Press.

田中正 (1995)『物理学と自然の哲学』新日本出版社。

丹治信春 (1996)『言語と認識のダイナミズム』勁草書房。

Historical Dimension of Knowledge

Yasuo NAKAYAMA

This paper provides a sketch of an epistemology that deals with the historical dimension of knowledge. This is an attempt to uniformly describe Quine's holism, Kuhn's Philosophy of science, and Gadamer's philosophical hermeneutics. For this purpose, the Theory of Belief Structures (TBS) —— that was a framework developed in Nakayama (1995) and used in Nakayama (1997a, 1997b) —— is applied. This is also an attempt to construct a dynamic holistic epistemology. The subject, a bearer of beliefs, is revealed as a historically situated being.

Keywords

belief structure
belief system
holism
paradigm
hermeneutics